

第IV部門

味のある空間のイメージに関する研究

大阪工業大学	工学部	都市デザイン工学科	○白藤	慶樹
大阪工業大学	工学部	都市デザイン工学科	青木	謙太
大阪工業大学	工学部	都市デザイン工学科	井上	光司
大阪工業大学	工学部		田中	一成

1. はじめに

歴史的背景として、我々日本人には「味がある」と表現される美意識、価値観が存在し、この概念は1180～1190年代に誕生したとされる。それは現代においても多くの場面で使用されており、日本人に根付いている感覚であるといえる。しかし、上下水道や道路、堤防などの構造物は建築物等と異なり、その評価方法は必ずしも充分とはいえない。社団法人土木学会は、歴史的に重要な構造物・建築物を土木学会選奨土木遺産¹⁾として認定しているが、認定するにあたって、特に技術面と希少性に重きをおいて評価している。これらとは異なる角度からの評価を取り入れることで、土木構造物の保全・保護、あるいは計画や設計に対しての新たな視点や価値観を生み出し、その捉え方が変わる可能性があると考えられる。

2. 研究の目的と方法

建築物のファサードの古さの評価や、住宅や室内の落ち着きに関する研究はなされているが、味についての言及はなく、直接空間の味に関する研究はなされていない。味とはどういう印象なのか、どのように感じられるのかを明らかにする。これにより、この概念が今後広く使われる可能性を考察する。本研究では、基礎調査として行ったKJ法と「味のある空間」としての「味」の意味についてのアンケート結果にもとづいて、室内に関して「味がある空間」を捉えやすいと考えられたため、将来的には屋外の構造物や公共空間に適用することも視野に入れ、着想が得やすい

室内空間を対象とする。研究方法は、主にアンケート調査を実施する。さらに、画像処理を行ったシーンをもとにした実験により、得られた統計データをもとに様々な分析方法を用いて、得られた各分析結果に対して考察を行う。

3. 味のある空間を構成する要素とその評価

本研究では被験者に自由に想像された空間を対象に印象評価を行うために、5段階のSD法による質問と、その想像された空間を和室・洋室・木調といった部屋の形式と室内にあるものをおおよそ把握する質問を用いたアンケート調査を76人に対し実施した。使用した形容詞と、その平均値を図1に示す。

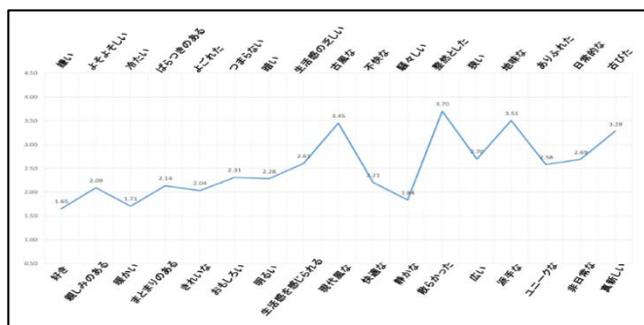


図1 SD法アンケート結果平均値
得られたデータに対して、形容詞の選択割合等から確率分布による分析、共起ネットワーク分析と主因子法による因子分析を行う。

空間の形式ごとに確率分布を分けると、形式によって軸の位置や曲線のなだらかさに差が出た。部屋の形式分け共起ネットワーク分析の結果として、部屋の形式により、形式とものの関係に大きく差が出た。部屋の形式によって味を感じる空間に違いがあることが分かった。

Yoshiki SHIRAFUJI, Kenta AOKI, Koji INOUE, Kazunari TANAKA

yoshikishirafuji@gmail.com

主因子法による因子分析では、表1に示す4つの因子を得た。因子1と因子2に

表1 因子行列まとめ

因子	選択した形容詞	値
因子1	現代風な	0.610
	真新しい	0.651
	明るい	0.536
因子2	きれいな	0.838
	まとまりのある	0.640
	散らかった	-0.677
因子3	おもしろい	0.735
	派手な	0.412
	ユニークな	0.676
因子4	快適な	0.751
	静かな	0.569
	散らかった	-0.406

ついて、因子1は「爽やかな感じ」と、因子2は「統一感のある感じ」「洒落た雰囲気」と解釈した。これらの分析の結果から、味のある空間がとり出された。

4. 方向とイメージの関係

視覚的に味に影響を与える方向と評価の関係をみるために、1つの図の明るさと暖かみを編集し組合せて4つの図を使った一対比較による評価（調査1）を約98人に、1つの図の空間構成要素²⁾、上方(a)・側方(b)・下方(c)・上方側方(d)・側方下方(e)・上方下方(f)をそれぞれ暗く暖かく編集した6つの図の並び替え評価（調査2）を29人に、それぞれアンケート調査を実施した。

はじめに、調査1より、図を暗く暖色を強めた図が最も味があり、味を感じる要因として、暖かい>暗い>明るい>冷たいという順で味を感じるという結果を得た。

次に、調査2より、順位に応じて点数評価を行った結果、2箇所を編集をした図が上位に、1箇所を編集した図が下位となった。味を感じられると思われる箇所が多い図の方が味を感じられやすいことが分かった。さらに、この調査において、回答者が連続して選択させた図について、考察した結果、ある1つの箇所に注目し、次いで異なる方向をみることで順位を決定していることが分かった。

最後に、編集した箇所について、選択回数

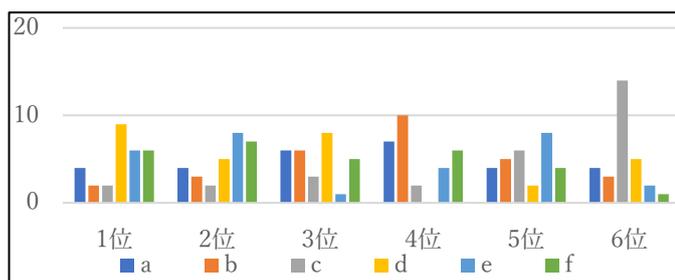


図2 順位について各図の選択回数

と順位からレーダーチャート図を1位から6位まで作成すると、図3のように側方と上方下方を基準に直線が引ける。これにより、一般的に味を感じるにあたって注目するのは、側方上方側に多く、下方にはあまり注目していないといえる。

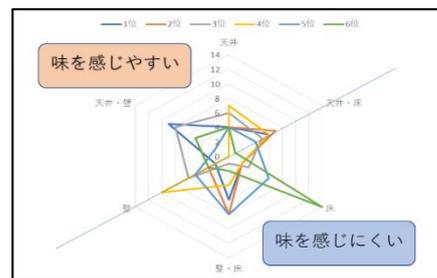


図3 レーダーチャート

5. おわりに

本研究では、味のある空間のイメージについての全体像を把握を行った。基礎調査の結果より、空間にあるものが、その空間の添景のような役割を担っていて、結果としてその空間には味があるという印象をもたらすと推測した。3の調査分析より、味のある空間はどのような空間であるかの推測を可能にする味の因子を得た。また、実験対象としての空間の形式により顕著な差がみられることから、その形式に合ったものや雰囲気で構成された空間に味を感じられるという傾向がみられた。4の調査分析より、味の要素の優先順位や、味を感じる時に注目される箇所の特定に至った。しかし、SD法との間で齟齬もみられた。これは、SD法で想像された明るさと、視覚的に見た時の明るさに差があるからであると考えられる。今後はこの差の明瞭化や、形式における味の差や統一性の評価を行い、対象をわけた時の味の感じ方の変化について比較する必要がある。また、この結果をもとに対象を都市施設・公共空間へと広げ調査する必要がある。

参考文献

- 1) 土木学会土木史研究委員会、『日本の近代土木遺産（改定版）—現存する重要な土木構造物 2800選』、土木学会、2005
- 2) P.シール、船津孝行訳編『環境心理学 6 環境研究の方法』誠信書房、1975